

RとNのカァディスからの手紙（104） 2006年5月5日

「続・トラファルガル」の巻

前回に引き続きトラファルガルの風景です。前回の(103)を見てからご覧下さい。

さて、灯台砂丘のテッペンから辺りを見晴らすと、また一段といい景色です。南は先週の写真のタンヘル **Tanger** 方面のアフリカ、西は勿論渺茫たる大西洋。北はカァディス方面ですが、カァディスまでは見えず、帰りのバスの中継点、コニール **Cinil** あたりが見えます。そして東を見るとこんな風、バルバーテ **Barbate**、タリファ **Tarifa**、さらにはジブラルタル海峡の対面のアフリカ。



上は先週砂丘の左肩と言った、灯台砂丘の東肩部からバルバーテ方面を見たところ。マグロの町バルバーテから歩きに歩いた例の「タホの断崖」が一番手前の岬を少し向う側へ回り込んだ所。「タホの塔」で引き返さず、もう少しこちら側まで来ていればトラファルガルが見えた筈。右端近くの低い岬がタリファ **Tarifa** です。

*



これは、前の写真の右端部分にズーム・インしたもの。左手前の低く伸びた岬がタリファです。中央から右の部分雲のすぐ下にごっつい岩山があるのがわかりますか。距離が遠い(約65キロ)ので陰が薄いですが、これがジブラルタルの岩山と共に「ヘラクレスの柱」**Columnas de Hércules** と呼ばれる岩山でギリシャ神話ではヘラクレスがこの二つの岩山をちぎって分けたと言うそうです。

この山は古くはアビラ **Ábila** 山と呼ばれたものらしいですが、いま手元にある地図や海図などでは **Yabal Musa** とも **Jbal Musa** とも **Sidi Musa** とも書かれていてどれがほんとか、どれは何語かはっきりしません。**Musa** は女神ミューズであることは確かです。**Jbal** は **Jabal** または **Jebel** のミスプリントかも知れませんが、多分アラビア語の「山」だと思います。**Yabal** はそのスペイン語表記か? **Sidi** に至っては全然お手上げ。アラビア語で村や町を意味するらしい。確信はありませんけど。

旅行書ではヘラクレスの柱を、ジブラルタルの岩山エル・ペニョン・デ・ヒブラルタル(**El Peñon de Gibraltar**=英語名ザ・ロック **The Rock**=**Calpe** 山)と、それに対するもう一方をジブラルタルの対岸にあるスペインの飛び地セウタ **Ceuta** であるとしています。これは何かの間違い。ヘラクレスの柱は一对の岩山であるはずですが。

この山は部屋探しのためにカアディスに通っていた頃、アルヘシラスからタリファにかけての峠道を通るたびに、眼前に大きく良く見えたものでしたが、最近はハッキリくっきり見えたタメシがありません。この日もこの直前まで雲が掛かっていました。ヘラクレスの柱のもう一方、ジブラルタルの岩山 **The Rock** はこの場所からではタリファの内陸の山に隠れてしまい、見る事が出来ません。

タリファ岬は本当はタリファ島ですが、細い通路で本土とつなげてしまっているんです。地図には Punta de Tarifa=タリファ岬と書いてありますが、海図では Isla de Tarifa=タリファ島としています。その右手、この写真の中央付近が海峡の入り口です。こうして太陽を背にすると、青い海は益々青く見えます。



灯台砂丘の西端は断崖になっていてそこから見た北の方角。砂丘と見えた灯台の丘も実はこの辺で良く見る地殻変動による断層でできたものだったんですね。



灯台の管理棟入り口の銘板タイル。DEのDとEが重ね文字になってました。

*

では、最後に極め付きの青い空。蒼穹という字がピッタリの感じですね。いつまでも
こういう青い空を大切にしてもらいたいものです。
千年の昔の灯台と新しい灯台、白い灯台と青い空、言うことナシの青い空。



スペインの現政府は太陽光発電と風力発電をしきりに奨励しているようでケッコウなことだと思えます。この近くでも風力発電は盛んですが、一方では景観が悪くなると反対するデモなんかも報道されています。石油資源の無いスペインでは自然のエネルギーを利用することは必須だと思いますが、景観が悪くなるから風力や太陽光発電には反対だ、という人たちは原発の方がイイとでも言うのでしょうか？

スペインにとって、この抜けるように蒼い空はナニモノにも代えがたい財産だということをしっかり認識して欲しいと思うのは私達だけではないでしょう。原発推進を図るような人種は目先の欲に目がくらんだ亡者としか思えません。

この景勝の地にオンボロ・キャラバンで巣食っているヒッピーも、スッポンポンのナ

チュラリストやらも景観阻害が甚だしい。基本的には平和主義者で、ヒトに危害を加えることはないヒッピー、だから警察も放っておくのでしょう。でも見る方の不快感は免れない。それにナチュラリストだか何だか知りませんが、スッポンポンも正視に堪えない点である種の自然破壊じゃなかるーか。原発よりヤマシだけど。

「新しいAmigo」の巻

先週の火曜、マグロ屋フェルナンドの店を覗きに行きました。冬の間散々通ったのに殆どいいモノがなくて、その都度プリマベラ(春)だよ、プリマベラになるまで待つてネ、と言われ続けてきてましたが、いよいよその春です。

それどころか日中の浜はもうとっくに夏の気配。

市場に入ると入口のすぐ近くで、フェルナンドが誰かと立ち話をしていました。私達を見つけると手を上げて立ち話を打ち切り私達のほうへやってきました。そして開口一番、まだいいモノが出ないんだよ。先週小さいのが一つ入ってその残りが少しあるけどこれはダメ、やめたほうがイイ、と言うんです。とにかく店に行ってみました。

なるほど、台の上にある赤身のブロックはみんな解凍モノで、一切れだけでも色が変わりかけたようなのが、先週でたフレスコ(生もの)なのでしょう。これじゃどうにもなりません。5月になったら多分期待できる、と彼は言うんですがこればかりは自然相手ですから仕方ありません。

私達が解凍ものには手を出さないという事を良く承知の上で言っているのだから、彼の見込みに期待するしかありません。彼のマグロは他の店よりやや高値だけれど、決して割高感を持たせません。オオトロでも全然しつこくない。蓄養マグロとは一味も二味も違います。それに高いと云って日本のようなバカな値段ではないしね。

それじゃ、久し振りに旧市街の散歩でもして帰ろう。私達の旧市街の散歩コースの一つ、本屋に行って立ち見を楽しみました。立ち読みと言いたい所ですが辞書ナシでスペイン語の本が読めるわけはありません。まあ、立ち見だろうが立ち読みだろうが、要はタダの暇つぶし。カァディスという町は人口14万といわれていてその大部分は新市街に住んでいるはずですが、マトモな本屋は旧市街にしかありません。

図書館も全くダメ。私達が知る限り旧市街に一つ、新市街に一つありますが、建物は小さいし窓から覗いただけでも中身はサッパリらしい様子がアリアリ。前に住んでいたベナルマデナには建物だけは立派なものがありましたが、図書の実度はお世辞にも立派とは言えませんでした。何回か足を運びましたが、大型本の写真集などを一通り見てしまうとモウ用はなく、ソレきりでした。

だから、カァディスに来てからも、入って見る気が起きず二つあるどちらへも行っていません。その代わり旧市街に何軒かある本屋はマズマズの充実度で、どうせ活字を読むわけではないのですが、写真や地図を見るだけでケッコウ楽しめています。

私達の図書館代わりと言ってもいいでしょう。椅子もテーブルもありませんけどね。

旧市街で一番大きい本屋で30分ほどもうろうろしていたでしょうか。ソロソロ足も疲れてきたし、帰ろうとしたんですが、出入り口付近の新刊書のウインドウに日本料理の本を見つけたので、そこでまた引っかかっていました。

すると、やはりそのウインドウを見ていたらしい大学生風の若者が「アナタガタハ、ニホンノカタデスカ？」とたどたどしく、しかし、礼儀正しく話しかけてきました。

「ワタシハ、ニホンゴノベンキョウヲ、シテイマス」それから暫くそこで立ち話していたんですが、彼はもっと話したいらしい様子だったし、私達は足にキテいたので、どこかカフェでも行きましょう、と彼の案内で近くのカフェテリアに入りました。

お互いに改めて自己紹介をして、1時間以上も話し込んでいたでしょうか。彼は話し言葉だけでなく漢字も500字くらいはダイジョーブと言っていました。私達のたどたどしいスペイン語と彼のニホンゴでオシャベリを楽しみました。

*

彼はカアディス大学の1年生で18歳。名前はファン・カルロス。私達が出合った本屋の近くに住む日本人女性にモウ4年間も日本語を習っているのだそうです。この若さで4年もやっていて、こんな程度かなー、と思うほどたどたどしい日本語ですが、週一回・一時間だけというし、その日本人女性以外には日本人に接する機会は全く無い環境なのだから仕方がないでしょう。何しろ「異文化」ですからねー。

ソレよりも私達のオドロキはカアディスにも日本人が住んでいたということ。その女性はスペイン人男性と結婚して、二児の母親だとのこと。もう20年以上スペイン暮らしが続いているらしい。ヘー、やっぱり居たんだあ、日本人がー。

昼食の時間も大分過ぎたし、じゃソロソロお別れしましょう、ということになりました。彼は「マタ、アウコトガデキマスカ？」ええ、勿論。それじゃ今度はうちにいらっしやい。と誘うと、「ホントウニ？」と嬉しそうな様子。「デハ、イツガイイデスカ？」いつでもどうぞ。「デハ、コンドノモクヨウビ、イイデスカ？」木曜日？バレ(OK)。アスタ・ルエゴ(じゃ、またね)。

マルタが聞いたら、ナンテ危険ナ、とまた目をムキそうな成行きになりました。そのマルタとは、その後、語学交換も途切れています。なぜなら彼女自身は全く日本語を勉強する意志は無いことが分かってきたから。それでは当初のお互いの了解事項だった交換にはなりません。まあ、私達の勉強になりさえすればそれでも良かったんですが、実はソレも殆ど期待ウスということが分かってきたんです。

なぜなら、彼女、猛烈なオシャベリ好きだったんですね。ソレも殆ど一方的に機関銃のようにスペイン語で喋り捲る。その辺の下町スペイン・オバサンと全く同じ。

私達のヨチヨチ歩きのスペイン語の勉強には全然役に立ちません。

思うに彼女は離婚後の孤独な生活に疲れて誰か話し相手が欲しい矢先だったので、私達の「交換希望」の申し入れに飛びついたんですね。

コッチは暇なインテリ女性らしい彼女に、もうちょっと「スペイン語の手ほどき」的なことを期待したんですが、肝心の仲介言語たる彼女の英語が殆ど私達には聞き取れない「エイゴ」だったし、彼女自身英語には全く自信が無いらしいことも分かってき

ました。結局、彼女の機関銃的スペイン語独演会になってしまっていたんです。いよいよスペイン・オバサンの本領発揮という感じ。これじゃ、八百屋や魚屋の店先で下町オバサン同士の機関銃の応酬を聞いているのとなんの変わりもありません。

ところが、ファン・カルロスには極めて稀な穏やかで物静かな感じの若者です。ニホンゴを話すときは勿論、スペイン語を話すときも、ユックリ私達に聞き取れるように配慮している様子がありありと分かります。また現役の大学生の強みで英語もOK。もっともコレはあまり得意ではないらしく、自分から進んで話すふうではありませんが、充分解る様子です。自分でも英語力は日常生活には不便が無い程度と言っていました。

先週木曜日、早速彼がやってきました。4時間近い在宅。お互いに充分満足のいく会話ができました。マルタとの大きな違いは自分のニホンゴを磨きたいという熱を持っていること、私達のスペイン語を聞き取って間違いを正してあげよう、正しい表現を示してあげよう、という姿勢がはっきり見えることです。これこそ語学交換です。私達が話す日本語で彼が今までに聞いたことがない新鮮なものはすぐノートに書き込んでいました。

私達も長年疑問に思っていたことが一つ解決しました。

スペイン語のホセ **José** という名前、この名前は言ってみれば太郎・花子的名前だと前にも言いましたね。この名前の愛称はペペ **Pepé** と言うんですが、コレがなんとも解らない。ホセは英語ではジョーゼフ **Joseph** ですがその英語での愛称はジョーまたはジョーイ **Jo, Joe, Joey**。

*

愛称は本来の名前の短縮形が普通でしょうからこれなら解りますね。例えばファン・カルロス **Juan Carlos** の愛称はファンカ、極めて解り易い。ところがホセとペペは字数は同じだし、字面の共通点も全くありません。強いて言うなら両方共語尾の (é) にアクセントがあることぐらい。長い間の疑問だったこれをファンカに聞いてみました。ポル・ケ? (¿Por qué? =何故?)。

彼の説明は明快。キリストの母マリアの夫は大工のヨセフだった。ヨセフはスペイン語名ではホセ。ヨセフ即ちホセはマリアの夫ではあったけれどキリストの父ではありません。だからホセは「たてまえ上の父」 **Padre Putativo** であった。この頭文字は **PP**、これをスペイン語読みすれば「ペペ」となる、と言うのです。

なるほどスペイン語のアルファベットでは「**P**」は「ペ」ですからね。ヨーク解りました。これはやはり聖書を知っているヒトでないとなかなかわからないでしょう。因みにプタティーボ **putativo** を辞書で引いてみると、「(父親・兄弟について)推定の」、「(実際にはそうではない)仮の」、「たてまえ上の」、等の訳語と共にパードレ・プタティーボ **padre putativo** という例が並んでいます。

どうやらこの単語はこの例だけにしか使われていないんじゃないか? という感じがします。何しろマリアは「無原罪のお宿り」という摩訶不思議な懐妊をしたのですから大工ホセが父親であるわけはありません。どうしても「たてまえ上の父」と言うしかないんですね。そのホセも今ではサン・ホセ **San José**、と聖人になっています。

彼のリュックには日・西、西・日辞書を初め、日本語単語集、スペイン語で書かれた「武士道とは？」なんていう日本文化紹介の本も入っていました。マケソー。でも、私達のスペイン語関係辞書の数には彼も驚いていました。とりわけ二つの電子辞書には目を丸くしていましたヨ。すぺいんニハ、コンナモノハアリマセン。

そう、ないですねー、ペーパー辞書だってやたらに大きいばかりで、語数は全く少ない。日本のコンサイズみたいなサイズであんな語数のものはマズありません。そして、私達がスペイン語は全く独習だと言うことにも驚いていました。

日本の大半の大学生が大学へ入ったとたんあまり勉強をしなくなるのに較べて、欧州諸国の大学生は大学へ入ってから本格的に且つ猛烈に勉強するらしい。第一、大学へ行く人数は日本やアメリカに較べると断然少ないし、大学の数も全く少ない。まあ、段々に増えつつあることは確かなんでしょうけれど。

日本の大学生が一般的にあまり勉強しないのは、受験戦争が激しすぎるあまり、大学へ入ったとたん何をしに入ったかを忘れてしまうのではないかと？ ネコも杓子も大学へと言う風潮がイカンのか？ 困ったモンだ。

これからも、木曜日に来てイイデスカ？ ええ、勿論いいですよ。でも来る前に電話をしてね、都合が悪いこともあるかも知れないから。「ハイ、ソウシマス」と言って彼はギッシリ本が詰まった重いリュックを担いで帰って行きました。いまどき珍しい律儀で生真面目な大学生。パードレ padre は治安警察 Guardia Civil だそうで、これならマルタも安心かな？
